

書評

弘末雅士 編

『越境者の世界史——奴隷・移住者・混血者』

(春風社、二〇一三年)

久礼 克季

本書は、従来の歴史研究において、支配者や有力者と比較してあまり光を当てられてこなかった奴隷や現地人妻妾、外部からの移住者や彼らから生まれた混血者といった、異なる世界や社会間の交流を仲介してきた人々、すなわち越境者に焦点を当てて論じる。その議論は、地域ではアジア、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカ、時代では古代から近代まで非常に広範囲にわたっており、これを通じて広域秩序と地元秩序との関係の変容を明らかにする。本書は、編者である弘末雅士による総説と三部の構成をとり、各論文のタイトルと執筆者は次の通りである。

総説 (弘末雅士)

第一部 前近代における隷属の多様性・流動性と近代におけるその変容

序 (清水和裕・貴堂嘉之)

第一章 「古代地中海世界における奴隷」 (高橋秀樹)

第二章 「イスラーム世界における奴隷」 (清水和裕)

第三章 「ポルトガル海洋帝国における奴隷」 (疇谷憲洋)

第四章 「奴隷解放と人種主義のグローバル・ヒストリー——「奴隷国家」から「移民国家」へのアメリカ

合衆国の変容」 (貴堂嘉之)

第五章 「近代東アジアにおける「奴隷」概念」 (石川

禎浩)

第二部 広域秩序と地域秩序の仲介者

序 (荷見守義)

第六章 「宗藩の海」と被虜人」 (荷見守義)

第七章 「文禄・慶長役の後に朝鮮被虜人と刷還使が将

来した西洋情報」 (鈴木信昭)

第八章 「四つの口」の女と男——近世日本の国際関係における異民族間の異性関係の諸相」 (荒野泰典)

第九章 「近世イングランドの都市コミュニティと移民
——ノリッジのオランダ人とワロン人」 (唐澤達之)

第三部 両義的存在を否定した近代と新たな仲介者

序 (弘末雅士)

第一〇章 「一九世紀のカンボジアにおけるマレー人観
の変容」 (遠藤正之)

第十一章 「トリエステにおける民族分化——超民族都
市から民族対立の舞台へ」 (佐々木洋子)

第十二章 「民族／国民への帰属、階級への帰属——シ
カゴの「スウェーデン／ドイツシユ教育同盟」(一九一五
—一九五六)の歴史から」 (土田映子)

第十三章 「二〇世紀前半期のインドネシアにおける現
代人妻妾をめぐるイメージと男女関係」 (弘末雅士)

第一部、前近代における隷属の多様性・流動性と近代に
おけるその変容は、一般的に奴隷と総称される隷属的存在
となった人々をとりあげ、古代から近代まで論じる。高橋
論文は、「奴隷制社会」といわれる古代ギリシア・ローマ
世界の奴隷を検討し、当時彼らの使役状況は大きく変動し
ていたことを指摘する。そのうえで、奴隷のあり方は、使
い捨ての道具とされる者から権威者の下で多くの自由人よ

り遥かに大きな富と力を持つ者まで多様で、自由人から奴
隷になることやその逆も稀ではなかったと論じる。清水論
文は、中東・西アジアのイスラーム社会における奴隷をと
りあげ、古代地中海世界の奴隷制を継承した同社会におい
て奴隷が家事労働をはじめ多くの用途で用いられていたこ
と、また女性の奴隷との性交渉を通じて混血と同化が進行
したことを論じ、これら奴隷の隷属性が家長の家族に対す
る保護と支配を祖型として展開したことを指摘する。疇谷
論文は、一六世紀から一八世紀にポルトガルが広大な海洋
帝国を形成するなかで、奴隷が都市での労働やプランテー
ションや金鉱採掘といった経済活動を支えるものとして帝
国内で重要な役割を果たしていたとし、こうした状況でア
フリカ系奴隷を中心に奴隷貿易が展開されたことによっ
て、特に大西洋世界において現在に至るまで奴隷制度の影
響が残ったと論じる。貴堂論文は、アメリカ合衆国が、一
方では万人平等の啓蒙的理念を掲げながら他方で奴隷制を
抱えて建国され、奴隷や年季奉公人といった不自由労働者
が多数同国に流入したことを指摘する。そのうえで、合衆
国が南北戦争を経て奴隷解放を達成した後には、自由意思
に基づく移民のみを受け入れる「移民国家」としての体制
を一気に整えていったことを述べる。石川論文は、東アジ
ア地域において古代から存在した奴隷という話が、近代に

入ると西洋の進出にさらされるなかで、黒人奴隸、さらには精神的隷属性を指すように変化し、自らのあり方を「奴隸根性」という言葉を用いて批判しながら同地域の人々が近代を歩んでいったことを明らかにする。

第二部の広域秩序と地域秩序の仲介者は、国民国家形成以前およびその過渡期において広域秩序と地域秩序とを仲介した被虜人、漂流民、商人、移民、使節らを取りあげる。荷見論文は、明朝が海防力を強化し宗藩体制を施行したにもかかわらず後期倭寇の時代を中心に沿岸民が連れ去られたことで被虜民（漂流民）が発生したこと指摘し、特に中国と朝鮮の間で行われた被虜民の送還が、両王朝の宗藩關係を確認する儀式であるとともに、王朝が彼らの持つ情報を引き出す役割を持っていたと論じる。鈴木論文は、一六世紀末の文禄・慶長の役を契機として日本に渡った後に帰国した被虜人がそれまで朝鮮で知られなかった西洋の情報をもたらしたこと、また朝鮮から明朝（後には清朝）に派遣された使節によって「紅夷」と呼ばれるオランダ人の情報もたらされていたとしたうえで、しかし両者の情報は総合されることはなかったことを、それぞれ述べる。荒野論文は、近世日本において国際關係が営まれた「四つの口」（長崎・対馬・薩摩・松前）のうち特に長崎口と平戸における一六三〇年代以前とそれ以後の異民族間の男女關係を

比較し、徳川政權が後者の時代に行った海禁政策強化を通じて、外国人男性の長期滞在者の排除や外国人男性と日本女性との關係禁止、混血者の排除といった性關係の管理を行ったことを論じる。唐澤論文は、イングランド南東部の都市ノリッジが、一六世紀後半から一七世紀初頭にオランダ人とワロン人移民を受け入れることで衰退に直面していた毛織物工業の復活に成功したことを指摘する。そのうえで、同地の外国人教会を通じた移民管理によって、移民は、出身地とのつながりを維持しながら教会を拠点とした独自の社会集団を形成して移住先の社会とも共存し、後にいずれかの社会へと選択的に統合していったと述べる。

第三部、両義的存在を否定した近代と新たな仲介者は、前近代において仲介役・媒介役を担ってきた人々の、近代諸概念にともなう広域的な変化のなかでの変容をとりあげる。遠藤論文は、一六世紀から一九世紀前半までの時期においてカンボジアをマレー半島およびマラッカ海峽域と結び付け、華人商人との間で中継貿易を行ったマレー人の役割が、一九世紀後半以降フランスによるカンボジアの保護国化と仏領コーチナの形成にともないメコン川交通が重視されることによって低下したこと、その一方でメコン川流域に入植したチャム人の存在が同時期以降クローズアップされたことを論じる。佐々木論文は、それまで超民族的

な社会を形成してきた海港都市トリエステにおいて、一九世紀のイタリア王国成立やオーストリア・ハンガリー二重帝国形成にともなう民族平等政策、またトリエステの経済発展によるスロヴェニア語地域からの移住者流入の結果、当時議会の多数派だったイタリア系住民とそうではないスロヴェニア系住民との対立が先鋭化していったことを指摘する。土田論文は、一九世紀末から二〇世紀初めにかけてアメリカ合衆国シカゴに多数流入し「スウェーデン系だからこそよきアメリカ人たり得る」という「スウェーデン・シユ・アメリカニズム」との主張を唱えたスウェーデン系移民が、合衆国の第一次世界大戦参戦によるアメリカ化への圧力や彼らの子孫による同国の大衆文化享受を通じて、アメリカの国民集団への帰属意識の中へ回収されていったことを述べる。弘末論文は、オランダ領東インド（インドネシア）においてヨーロッパ人男性と同棲し外来者にその地の言語や慣習を教え、ニヤイ（ねえさん）と尊称で呼ばれた現地人妻妾が、植民地体制の確立にともなう人種的差異の強調とそれに対抗した民族主義運動台頭とともに周縁化された一方、二〇世紀前半にはヨーロッパ人男性と現地人女性との自由恋愛をはじめとする多様な男女関係が生まれ、両者の同棲は後退せず「混血婚」はむしろ増加したことを指摘する。

史苑（第七五卷第一号）

本書は、古代ギリシア・ローマから二〇世紀前半のインドネシアに至るまで長期間かつ全世界的規模にわたる越境者の置かれた状況を俯瞰していることが、大きな特徴となっている。上記の通り異なる時代や地域を扱った一三本の論考で構成されている本書であるが、各論文で議論される内容は互いに密接に連関している。加えて本書では、主題となる奴隷や移住者、混血者についてそれぞれ詳細な検討を行うことで、彼らの果たした役割や社会における位置づけの変遷が明確にされる。例えば奴隷にかんしては、奴隷にも自由人にもなりえる存在だったといえる被虜人を含めると、高橋論文、清水論文、疇谷論文、貴堂論文、石川論文、荷見論文、鈴木論文で議論されている。これらから、古代地中海世界やイスラーム世界をはじめ、近代以前には隷属性に関して自由人との間に多様な関係があり流動性も高かった奴隷が、一六世紀以降のポルトガルによるアフリカ系を中心とする奴隷貿易が展開するなかで特に大西洋世界において社会的マイノリティとして差別や統制の対象となり始め、一八世紀末から一九世紀中葉のアメリカ合衆国で自由人（白人）と奴隷という身分制が定着していったことが見て取れる。またこれにともない、近代以降の東アジアでは、奴隷という言葉に精神的隷属性との意味が付与さ

れることも指摘される。こうした経緯を見ると、我々の連想する奴隷のイメージは、まさに近代以降につくられたということがわかる。

また移住者や混血者にかんしては、鈴木論文、荒野論文、唐澤論文、遠藤論文、佐々木論文、土田論文、弘末論文で述べられ、奴隷をとりあげた清水論文や荷見論文でも言及されている。各論文の議論から、近代以前の移住者が、出身地とのつながりを持ちながら移住先の地域社会でも受け入れられたことが理解される。また混血者については、近世以前には奴隷と自由民との間に生まれた混血者も多数存在していた。特にイスラーム世界では、奴隷女性が主人との間で出産した子が認知されると子は自由身分となり奴隷女性も主人の死去の際に解放されることが約束されるウンム・ワラド（子の母）という制度が存在し、混血者は比較的容易に地域社会に受け入れられた。こうした移住者や混血者は、近世以降、地域社会においてより重視されたと考えられる。例えば被虜者は、その送還を通じて王朝の宗藩関係確認や他地域の情報を得るために重要な存在となった。また、一六三〇年代までの日本では、朝鮮の被虜人や技能を持った華人移住者が、新たな技術を導入していた。イングランド・ノリッジへ移住したオランダ人やワロン人もこれと同じ役割を果たしていたといえよう。さらに、

一九世紀までのカンボジアでは、マレー人が同地域の貿易を行う上で欠かせない存在となっていた。しかし、特に近代以降民族主義が展開するなかで、両義性を持った移住者や混血者に圧力がかかる。こうしたなかで、カンボジアのマレー人は同地域で周縁化し、アメリカ合衆国のスウェーデン人の多くは合衆国へ同化し、オランダ領東インドの現地人妻妾は近代以前のような仲介者としての重要性が語られることは少なくなっていたのである。

本書は、近代に対して新たな視点を提示しているという点で、非常に大きな意義を持つ。従来の研究では、それまで地域社会と広域社会との仲介役を担ってきた特に移住者、混血者が、近代では民族主義運動の展開や国民国家の成立にともない地域社会へ同化もしくは同社会からの排除を余儀なくされるという点が強調されてきた。しかし最終章で弘末が提示した、二〇世紀初頭のオランダ領東インドにおいて、出版資本主義の発展からインドネシア民族主義が展開した一方で自由恋愛をはじめとする多様な男女関係の言説が展開した結果ヨーロッパ人男性と現地人女性との婚姻はむしろ増加したという事例は、それまで存在していた移住者、混血者と移住先の住民との関係が、近代に入っても意味づけを変化させながら継続していたことを示すものである。この点において、同氏の指摘は、これまでの研

究では描き出せなかった近代の一面を新たに示しており、今後の近代史に坎する研究に大きな可能性を与えるといえよう。

他方で本書には、非常に惜しまれる点もある。それは、特に総説において越境者をめぐる近世の重要性が十分に示されていないことである。各章で議論された奴隷、移住者、混血者の地域社会における状況の変遷を見ると、彼らが置かれた状況は、近世から次第に変化し始めたことがわかる。地域社会における奴隷のマイノリティ化は一六世紀に大西洋地域へと送られたアフリカ系奴隷から顕著となり始めた。また、移住者や混血者については、一六三〇年代以降の日本で、徳川政権による海禁強化を通じた彼らに対する同化か排除かへ向けた圧力がいち早く見られた。他方で近世では、上述した一六三〇年代以前の日本や朝鮮のように、被虜者や移住者が情報伝達や技術導入において重要な役割を果たしたケースが見られる。またノリッジでも同様な状況が見られ、同地では同化も彼らに委ねられていた。これらの事例を考えると、近世は、越境者を重要視し自由に活動させた一方で、彼らに対する政権や地域社会からの統制も始まった時期といえ、その意味で、近世は越境者にかんして近代に向けての出発点となったと位置づけることができる。総説では、越境者の置かれた状況の変容は近代

以降に展開したとしているが、近世には既にその萌芽が生じていたことも指摘したうえで、議論すべきだったのではないか。そうすることで、本書の議論は、更に深く興味深いものとなっただろう。

しかし、本書が示した越境者に焦点を当てた議論は、今日注目されている、境界を越え、境界にとられない人々の活動について、歴史学から大きな示唆を与えるものであることは間違いない。またこの示唆の重要性は、歴史上だけに限るものではない。第一部の序で貴堂が指摘するように、例えば売春は性的奴隷制なのか、それとは区別される正当な労働なのかといった、奴隷と自由、隷属と自由意思の境界をめぐる議論は、現在にまで関わる極めて重要なものであるといえよう。その意味でも、この分野に関する研究の可能性は非常に大きい。今後の研究の進展に期待したい。

(本学アジア地域研究所特任研究員)